

Title	日本語の助詞・助動詞類のアクセント：一覧と使い分け，変化の方向性
Author(s)	郡， 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト． 2020， 2019， p. 13-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77063
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語の助詞・助動詞類のアクセント

— 一覧と使い分け，変化の方向性 —

郡 史 郎

要旨 首都圏中央部で使われる助詞・助動詞類のアクセントの具体的な音形を実用性のある簡潔な形で提示するとともに，その音韻論的型を郡(2015)の基準で分類した結果にもとづき，アクセントの変異のありかたと時代変化の方向性について考察した。「さえ・すら・より」「と」「よ・ぞ」については変異が意味の違いに由来すると考えること，変化の方向性としてアクセントの独立性が弱い型から強い型へという指向があることを述べた。

1. はじめに

郡(2015)では助詞・助動詞類のアクセントについて全体像のスケッチを提示した¹⁾。しかし，そこでは分類原理の説明に重きを置いたため，音読や教育の場での実用性への配慮が不十分だった。また，個別の助詞・助動詞のアクセントの整理を秋永一枝(編)(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版』のみにもとづいておこない，他の辞典等での扱いを検討しなかった。これはひとつの助詞・助動詞に対して複数のアクセント(変異形)が存在する場合に特に問題となる。そこには何らかの使い分けをするものがあるかもしれないし，新旧の違いと考えるべきものもあるだろう。実用的な観点からは，現在広く通用するアクセントを知りたいところであるし，理論的な観点からは，変異形についての情報が多いほど助詞・助動詞類の性格について理解が深まり，アクセント変化の一般的な傾向を知るにも役立つ。

秋永氏の辞典の本体には多くの助詞・助動詞類のアクセントが掲載されている。ただ，伝統的な東京の発音を重視するためかと思われるが，掲載形が現代の首都圏で主流の言いかたと異なる場合がある。また，「には」「ほどは」といった複合形のアクセントについての情報がすくない。2016年に刊行された『NHK日本語発音アクセント新辞典』にも，数は多くないが助詞・助動詞のアクセントが付表の形で提示されている。秋永氏の辞典と異なるアクセントが示されている場合もあるが，NHK新辞典の目的は「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」を示すということなので(「付録」p.2)，やはり保守的な性格は否めず，助詞・助動詞のアクセントについても現代的ではないと思われる言いかたをあげている場合がある(「だろう」「でしょう」)。また，NHK新辞典の提示方法はかなり見やすいとは言えるが，接続する品詞別に分けている点は利便性を損なっていると私は考える²⁾。

1) 助詞・助動詞や接尾辞など非自立形式にも独自のアクセントがあると考え，その特徴は名詞につく場合も動詞や形容詞につく場合も変わらないと仮定した上で，一般に文中で2つのアクセント単位が連続する場合にそれらが全体としてどのような音調形をとるかというイントネーション論的な観点を導入して整理した。助詞・助動詞など学校文法の用語を使うのは実用的な観点からである。

2) ひとつの助詞・助動詞ごとに半ページなり1ページを使って，複数の名詞，動詞，形容詞につく形をまとめて示す方法が利便性が高いと思う。

そこで本稿では、実用性を考えて掲載語形の数を複合形も含めて旧稿より増やし、変異形の新旧の情報も書き入れ、名詞、動詞、形容詞につく形をまとめた一覧表の形でアクセントを示す。示すアクセントは神保格・常深千里(1932)以降の辞典・論文等の文献資料の整理結果に主にもとづくが、独自の小調査で得た情報も参考にする。一覧表には、やはり実用性の観点から、助詞・助動詞には通常含めない「ごと[全部]」「らしい[適切]」など生産性が高い接尾辞のいくつか含め（まとめて「助詞・助動詞類」と呼ぶ）、アクセントも上線と下線で示す。そして、個々の助詞・助動詞類のアクセント型（解釈型）と、備考として文献資料での記載内容も一覧表に示し、それらをもとに変異形について若干の考察をおこなう。

以下では、まず2節で助詞・助動詞類のアクセントの全体像を郡(2015)とその後の考察（特に2.4節）にもとづいて概観し、3・4節で変異形についての考察を記し、最後に個々の助詞・助動詞等のアクセントの整理結果と補足情報を一覧表の形でまとめる。

2. 助詞・助動詞類のアクセントの全体像

助詞・助動詞類のアクセントは、次の①②③の3要素から成り立っていると分析できる。

- ①支配の関係：直前の形式のアクセントを支配するか、あるいはそれに支配されるか、または自主性を保ちつつ直前に協力するかの関係。それぞれを「乗っとり型」「乗っとられ型」「協力型」と呼ぶ。
- ②高さの接続の型：「順接」（直前のアクセントをそのまま生かす形で作る）または「低接」（直前のアクセントに関係なく低く作る）。「順接」はさらに、アクセントとして一般に平板式（平板型）とされる動詞・形容詞の終止・連体形や連用形を尾高型にして接続する「用言尾高要求タイプ」と、平板型で接続する「用言平板要求タイプ」に分けられる。これは①が「協力型」の場合に問題になる。
- ③内部の下げ：助詞・助動詞類等自体に下がり目があるかないか、あるとすればどこか。これは自立語のアクセントの型を決める要素と同じであり、頭高型、中高型、尾高型、平板型のように分けることができる。

以上を助詞・助動詞類の典型例とともに次の表にまとめる。記号「¹」は下げの位置を示す。

支配の関係	高さの接続の型		典型的な助詞・助動詞類
乗っとり型			なさ ¹ い、ま ¹ い、ま ¹ す；ごと[全部]
乗っとられ型			[さ]せ(1)る、な(1)い[助動詞]、[ら]れ(1)る
協力型	順接	用言尾高要求タイプ	な ¹ ど、な ¹ ら、な ¹ り；って
		用言平板要求タイプ	そ ¹ うだ[伝聞]、の ¹ み；ね[終助詞]、ほど
	低接		たち

2.1 乗っとり型

このタイプの助詞・助動詞類は、直前の形式のアクセントの独立性を奪って乗っ取る形で全体の音形を決める。「ます」を例にとると、「飲む」[ア|ム]のように終止・連体形に

下がり目がある動詞に対しては「飲みます」[ノ|ミマ|ス]となり、「乗る」[ノ|ル]のように下がり目がない動詞に対しては「乗ります」[ノ|リマ|ス]となる。つまり、直前のアクセントがどうであれ、全体を[…マ|ス]の形にしてしまう。

「館」^{かん}「県」「市」（以上は直前で下げる）や、「化」「性」「的」（以上は全体を平板化する）など接尾辞にはこのタイプのものが多い³⁾。

2.2 乗っとられ型

主に動詞・形容詞の未然形か連用形に接続する助動詞である。「せる・させる」を例にとると、下がり目がある「飲む」なら「飲ませる」[ノ|マセ|ル]、下がり目がない「乗る」なら「乗らせる」[ノ|ラセル]となり、「せる」の[セ]のあとで下げるかどうかは、直前の動詞本来の下がり目の有無に対応している。これは、助動詞のアクセントの独立性が直前の形式に乗っとられる形で全体の音形が決まるということである。

2.3 協力型

2.3.1 順接

助詞・助動詞が自分のアクセントの自主性を保ち、直前のアクセントも生かす。この特徴がわかりやすいのは、名詞に直接つく「なら」と「から」である。平板式の「鳥」に対する「鳥なら」「鳥から」はそれぞれ[ト|リナ|ラ][ト|リカラ]で、助詞による違いは明らかである。しかし、頭高型の「猫」[ネ|コ]に対する「猫なら」「猫から」は、ふつうに言えば[ネ|コナラ][ネ|コカラ]で、両者は（まったく、またはほぼ）同じ高さの動きになり、全体でひとつの単純語のような（または、それに近い）アクセントになる。ただ、ふたつの助詞の違いは潜在化するだけであって、なくなるわけではない。助詞の意味を強く意識して言う強調形では[ネ|コナ|ラ][ネ|コカ|ラ]となり、違いが顕在化する。

「用言尾高要求タイプの順接」と「用言平板要求タイプの順接」

順接はさらにふたつのタイプに分けられる。ふたつの違いは、単語の途中にアクセントの下がり目がないために一般に平板式(型)とされているタイプの動詞や形容詞—たとえば、「乗る」「働く」「赤い」「おいしい」—に順接の助詞や助動詞がつくときにあらわれる。

こうした動詞や形容詞は、特定の助詞や助動詞に対しては尾高型のふるまいをすると考えるべきである。一般に平板式(型)とされる動詞や形容詞に対して尾高型のふるまいをすることを要求するタイプの順接を略して「用言尾高要求タイプの順接」（たとえば「乗るか」[ノ|ル|カ]の「か」）、そして、平板型としてふるまうことを要求するタイプを「用言平板要求タイプの順接」（たとえば「乗るね」[ノ|ル|ネ]の「ね」）と仮に呼ぶことにする⁴⁾。このふたつの違いは、助動詞「だ」に接続する場合にもあらわれ、また2.4節で説明するように、助詞が連続する際のふるまいにもあらわれる。

3) 接尾辞には乗っとられ型（飲み物、乗り物の「物」等）も協力型（順接:「さん」、低接:「たち」等）もある。

4) この名称は郡(2015)では使用していないが、郡(2020)では使った。一般に平板式(型)とされる動詞や形容詞の終止・連体形のアクセントには、実は尾高型の場合と平板型の場合があるという考え方は、直接的には轟木靖子(1995)にもとづくが、実質的に同じことをすでに早田輝洋(1965, p.39)が述べている。

2.3.2 低接

接尾辞の「たち」は、「猫」「鳥」に対して [ネ|コ|タチ] [ト|リ|タチ] という形で直前のアクセントが平板式でも低くつく。これが低接である。「ら」「氏」などもこの仲間である。助詞・助動詞の場合は、低接だと積極的に言えそうなのは、告知などに使う終助詞「の」、そして「のだ」ぐらいである。告知の「の」は「好きな」[ス|キ|ナ] に対して「好きなの」[ス|キ|ナ|ノ]、「きれいな」[キ|ライ|ナ] に対して「きれいな」[キ|ライ|ナ|ノ] という形をつく⁵⁾。

2.4 助詞の連続

協力型の助詞をふたつ続けるとき、2番目の助詞の高さのとりかたに2種類がある。その違いは、平板式の名詞・動詞・形容詞に対して1番目の助詞が下がらずにつき、その助詞の中でも下がらず末尾が高いままのときにあらわれる。ひとつは、④2番目の助詞が1番目の最後より低くつくタイプである（「鳥に#は」[ト|リ|ニ|ハ] など）。もうひとつは、⑥2番目の助詞が1番目の最後と同じ高さで続くタイプである（「鳥ほど#は」[ト|リ|ホド|ハ] など、ただし [ト|リ|ホド|ハ] のように低くつける言いかたもある）。④になるのは、1番目と2番目の助詞がともに用言尾高要求タイプ、具体的には1番目が「から、で、に、へ」、2番目が「って、は、も」か「の」[格助詞] の場合である。⑥になるのは1番目か2番目かが用言平板要求タイプの「ほど」か、2番目が用言平板要求タイプの「だけ、ね」の場合である⁶⁾。

3. ひとつの助詞・助動詞類のアクセントに2形があるものについて

ひとつの助詞・助動詞類のアクセントに2形があるものの中には、その違いが意味の違いに由来すると思われるものがある。この節ではこれについて述べる。このほか、旧形か新形かが資料から推測できるものがあり、それについては付表に記入したが、そこに見られる変化の傾向について4節で述べる。また、平板式の形容詞連用形+「は」のように、意味の違いでも新旧の違いでもないように思われる2形が使われているものもある。

(1) 「さえ」「すら」「より」：名詞につくときのふるまいを見ると協力型で順接の助詞である。しかし、平板式(型)の動詞・形容詞に対して① [ノ|ル|サエ] と② [ノ|ル|サ|エ] のような2形がある。形容詞に対する [ア|カ|イ|サエ] のような形は①で、[カイ] の二重母音のために下げの前倒しが生じたと見る。①と②の違いについて、これらの助詞には用言尾高要求(①)と用言平板要求の使い方(②)があるという可能性はある。しかしこうした助詞

5) 2.3.1 節で説明したように、動詞・形容詞の連体・終止形は実際には尾高型の場合がある。そのため、低接だと確実に判断できるのは、平板式の名詞にそのまま低くつくものである。ここでは形容動詞の連体形に低くつくものもこれに準ずると考えて、終助詞「の」を低接と見た。和田實(1969)は「しか」を低接としているが、これについては3節(2)を参照。「が」[逆接]「から」「けど」「し」「な」[禁止]「わ」のアクセントは、順接で用言尾高要求タイプか低接のどちらかだが、これらは名詞に直接つかないし、形容動詞の連体形にもつかないの、どちらなのかが特定できない。このようなものは本稿では便宜上一律に順接・用言尾高要求タイプとしておく。

6) 同じ用言平板要求タイプでも、「ほど」は1番目の助詞として使う場合は次の助詞は同じ高さにつき、「だけ」は1番目の助詞として使う場合は次の助詞は低くつく。この違いは、「ほど」が平板型で、「だけ」が尾高型であることによる。これは前者が名詞の「程」から、後者が「丈」からという由来を反映したもので、このふたつの助詞は名詞としての性格を残していることを示すものと思われる。

はフォーカスを置く場面で使われることが多いことを考えると、フォーカスのために助詞も際だたせて助詞本来の頭高型の動きを顕在化させる発音が固定化したのが②で、そうでない本来の発音が①かと思われる。すると、アクセントはともに用言尾高要求タイプということになる。「かも」も②の形をとりうるが、それも可能性を強調する言いかたであろう。

(2)「しか」:平板式(型)の語につく場合、資料には①[シ]の前で低くなる音形、②[シ]のあとで低くなる音形(文献資料では動詞にはない)、③高く平らな音形(旧形と思われ、以下の考察から除外)がある。名詞に①と②があるのは、本来の型は②であるものが、[シ]の無声化で下げの前倒しをしたのが①と見るのが妥当だろう。金田一春彦(1981)がこの助詞のアクセントを「㊦」(本稿の①)としながら、「柄しか」は本稿の②にあたる[エ|シ|カ]とするのも①が下げの前倒しであるためかと思われる。もしどうしても[シ]の前で下げる必要があるならば「絵しか」と同じ[エ|シカ]でよいはずである。永田吉太郎(1935, p.92)も、無声化のため[シ]の高めがあらわれないと言う。動詞では文献資料では①だけなので、アクセントとしては協力型・順接で用言尾高要求タイプと見ることができる。やはりフォーカスを置く場面で使われることが多い助詞であることを考えると、独自調査での動詞の②は無声化環境下でもフォーカスが助詞本来の高さの動きを顕在化させた発音と考えることができる。名詞の場合も、②はフォーカスを置く場合の発音にもなりうるだろう。

(3)引用の「と」:平板式(型)の名詞や動詞に対して、①同じ高さでつく場合と、②低くつく場合がある。秋永氏の辞典本体には「と」に対して用法に言及なく①の形があげられているが、付録の表5の注1と表6の注2に「引用の『と』は平板式名詞(動詞)には低く下がってつくことが多い」とある。5節で説明する私の調査でも、名詞の場合①が多いが、②も併用または許容する人が複数いた(名詞のみ調査)。私は、②は引用であることを意識するときの「引用イントネーション」とでも呼べる言いかたではないかと考える⁷⁾。

(4)終助詞の「よ」「ぞ」:終助詞「よ」は、「乗る」など平板式(型)の動詞・形容詞に対して、同じ高さでつく①[ノ|ル|ヨ] (通常その後に疑問型上昇調のイントネーションをかける)と、低くつく②[ノ|ル|ヨ]がある。文献資料ではイントネーションへの言及なしで①をあげるものが多いが、両者にはやさしく教えるように言うか(①+疑問型上昇調)、一方的な通告として言うか(②)という使い分けがある(郡2018; 轟木2008の説明は付表の「よ」の項に記載)。

①は「ね」と同じく協力型・順接で用言平板要求の使い方と見てよいだろう。問題は②だが、名詞に直接つく場合は「あれは鳥よ」[ト|リ|ヨ]とは言えても、[ト|リ|ヨ]とは言いにくいようであること(轟木氏私信)から考えると、②は品詞にかかわらずかけられるイントネーションによるものではなく、「よ」のアクセントとして協力型・順接で用言尾高要求の使い方だと見るのがよいように思われる。本稿ではこの解釈をとっておく⁸⁾。「ぞ」にも発話意図にかかわる使い分けがある(轟木2008: 付表の「ぞ」の項参照)。

4. 変化の方向性

助詞・助動詞類のアクセントの時代的变化としてはっきりしているのは、「たい」「だらけ」

7) 「と」を高くつける言いかたは、強調型上昇調をかけるイントネーション(助詞上げ: 郡 2020, p.181f)。

8) 轟木氏(2008等)は②を低接と解釈する。郡(2020)でもそうしたが、本稿では扱いを変えている。

「ながら」の乗っとられ型から乗っとり型への変化である(付表の各項参照)。また、「だけ」、そしておそらく「ばかり」「そうだ[推量]」の乗っとり型から協力型への変化もある。これと同じ方向の変化の兆候があると解釈できるのが、「くらい・ぐらい」「ごと(毎)」「ずに」である。以上が支配の関係という大きな枠組での変化である。

「だろう」「でしょう」の変化(「乗るでしょう」[ノ|ル|デシヨ|一] → [ノ|ル|デシヨ|一])などは大きな違いに感じられるが、型としては協力型で順接という枠組は同じで、それが用言平板要求タイプから用言尾高要求タイプへと変化したものにすぎない。「か」「が」「に」「は」「も」「や」「を」を平板式の動詞に同じ高さで続ける言いかたは、旧形か表現上の変種か判断がむずかしいが、これも用言平板要求タイプと用言尾高要求タイプの間の変異になる。

全体として「乗っとられ型→乗っとり型→協力型」という変化の方向性があると言える。この方向性は、助詞・助動詞類がみずからのアクセントの独立性を弱いものから強いものへと変えていくという傾向と見ることができ、同時に、先行する語が助詞・助動詞類に左右されず常に同じ高さの動きをとろうとする傾向と見ることができ、これは、複合語のアクセントに見られるような対等合併型への変化傾向⁹⁾、つまり前部要素も後部要素も1語としてのアクセントの性質を失うという変化傾向とは正反対の方向への指向である。

なお、たとえば接尾辞の「館」のアクセントは乗っとり型で直前で下げるタイプだが、「図書館」[ト|シヨ|カン]を[ト|シヨ|カン]と言うような新しい発音は、「ドラマ」[ド|ラマ]を[ド|ラマ]と言うような名詞としてのアクセントの平板化傾向の一環としてとらえられるべきものであって、接尾辞のアクセントの変化とは見ないでおく。

5. アクセント一覧

付表として、主な助詞・助動詞といくつかの接尾辞のアクセントを、主に神保格・常深千里(1932)以降の文献資料にもとづいて示す。複数の音形があるものについての新旧の判断は、著者個人の内省を反映したものであることが明らかな林大(1954)[1913年生まれ]、早田輝洋(1965)[1935年生まれ]、清水めぐみ(2001)[1967年生まれ]の記述を重視しておこなった。また、いくつかについては首都圏中央部生育で2018年の時点で10・20歳台の学生10名と30～50歳台の3名への独自の小調査(発音調査に加え、5名については音声を聞いて選択させる調査:お世話になった方々に感謝申し上げます)の結果も参考にした。ここで新形としたのはかならずしも現在の若い世代だけのものではなく、起伏式形容詞の[シ|ロ|ク](白く)のように1950年代から辞書に掲載されてはいるが、伝統形ではないことがよく知られているものも含む。

9) 顕著なのが複合動詞での前部支配型(後部要素から見れば乗っとられ型)から対等合併型への変化である。対等合併型(郡 2015)とは「世界遺産」が[セ|カイ+イ|サジ→セ|カイイ|サン]となるように、前部も後部も本来のアクセントを失う融合形態で、複合動詞の場合は、たとえば「読み直す」「泣きやむ」が前部のアクセントの違いに応じて[ヨ|ミナオス]と[ナ|キヤム]だったものが[ヨ|ミナオ|ス][ナ|キヤ|ム]と、どちらも同じ型をとるようになっていく。「暗号解読」のような後部要素が動作性・状態性をあらわす複合名詞では、協力型の[ア|ジゴ→カ|イダク]よりも対等合併型の[ア|ジゴ→カ|イドク]のような発音が好まれつつあるようだ(陳曦 2019 参照)。「感染拡大」[カ|ジセジ|カ|タダク]→[カ|ジセジ|カ|クダイ]のように、ことばとしてのなじみ度が高くなることでもこの変化は生じうる。

助詞・助動詞類の内部のアクセントの上げ下げは、直前が低い場合は特に助詞等を意識した発音以外は潜在化することが多いので、その場合はこの表では記さない。備考欄とその左列のアクセント型（2節に述べた基準での分類結果）の欄では、アクセントは下げの位置を「1」で示し、上げは強調する場合の大きなものに限り「」で示す。①②等の記号は音形欄のものに対応するが、それぞれの資料が例示に使っている語例は異なるので、備考欄で①②と書いているのは、あくまでその型という意味である。□小86等は資料の略号（文献一覧参照）と記載ページで、□秋1, □秋2, □秋n1, □秋n2については、52項、表8等は付録の「アクセント習得法則」のもの、□Nについては[245]等は付録のページ番号、□独は独自調査の結果である。

文献

	略称
秋永一枝(編)(1981)『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂。(33刷)	□秋2
秋永一枝(編)(2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂。(1刷)	□秋n1
秋永一枝(編)(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂。(1刷)	□秋n2
上村幸雄(1989)「現代日本語 音韻」亀井孝他(編)『言語学大辞典 第2巻』三省堂。	□上
NHK放送文化研究所(2016)『NHK日本語発音アクセント新辞典』日本放送出版協会。(1刷)	□N
金田一春彦(1943)「標準アクセントの解説」『明解国語辞典』。(1刷復刻版)	□金1
金田一春彦(1952)「標準アクセントの手引き」『明解国語辞典(改訂版)』三省堂。(13刷)	□金2
金田一春彦(1981)「標準アクセントへの手引き」『新明解国語辞典 第三版』三省堂。(4刷)	□金3
郡史郎(2015)「助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き—直前形式との複合形態の観点からの分類—」『音声言語の研究9』(大阪大学) 63-74.	
郡史郎(2018)「終助詞類のアクセントとイントネーション—「よ」「か」「の」「な」「でしょ(う)」「じゃない」、とびはね音調の「ない」—」『音声言語の研究12』(大阪大学), 13-26.	
郡史郎(2020)『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』大修館書店。	
小森法孝(1987)『日本語アクセント教室』新水社。(4刷)	□小
酒井裕(1992)『音声 アクセント クリニック』凡人社。(1刷)	□酒
三省堂編修所(編)(1958)『明解日本語アクセント辞典』三省堂。(1刷)	□秋1
柴田武(1989)「アクセント表示について 付表」『新明解国語辞典 第三版』三省堂。(37刷)	□柴
清水めぐみ(2001)「東京語の助詞のアクセント」『国語研究』(國學院大學) 64, 32-63.	□清
神保格・常深千里(1932)『国語発音アクセント辞典』厚生閣。(20刷)	□神
田川恭識・中川千恵子(2014)「東京方言方言における形容詞連用形・終止形・連体形のアクセントについて—日本語話し言葉コーパスの分析を通して—」『音声研究』18(3), 14-26.	
陳曦(2019)「京阪式アクセント話者による複合名詞のアクセントの融合・非融合—東京式アクセント話者との比較—」『日本方言研究会第109回研究発表会発表原稿集』41-48.	
轟木靖子(1995)「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会会報』208, 1-8.	
轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察—」『音声言語VI』(近畿音声言語研究会), 5-28.	□轟
永田吉太郎(1935)「旧市域の音韻語法」斎藤秀一(編)『東京方言集』斎藤秀一。 (本稿付表掲載のページ番号は国書刊行会版1976のもの；記載内容は1935年版で確認・修正)	□永
林大(1954)「アクセント私見」『跡見学園紀要』1, 71-82.	□林
早田輝洋(1965)「動詞・形容詞などの活用とアクセント」『文研月報』4月号, 30-39/73, 折り込み付表。	□早
平山輝男(編)(1960)『全国アクセント辞典』東京堂出版。(25刷)	□全
松村明(編)(2006)『大辞林 第三版』三省堂。(1刷)【文節・活用形のアクセント例】	□辞
和田實(1969)「辞のアクセント」『国語研究』(国学院大学) 29, 1-20. (徳川宗賢編『論集日本語研究2 アクセント』有精堂出版1980所収)	

助詞・助動詞類のアクセント一覽

	名詞		動詞		形容詞		助詞・助動詞のアクセント型	備考
	起伏式 下がり目あり	平板式 下がり目なし	起伏式 下がり目あり	平板式 下がり目なし	起伏式 下がり目あり	平板式 下がり目なし		
単語の例	猫	鳥	飲む	乗る	白い	赤い		・この欄と左のアクセント型の欄ではアクセントは下げの位置を1で示し、上げは強調する場合の大きなものに限り「で」を示す ・①②等は左に示した音形に対応する；略号は本文5節参照
単独形・終止形	ネ コ	トリ	アム	ノル	シ ロイ	アカイ	①ア カイ ②新 ア カイ	形容詞平板式：アクセントが不安定なことはすでに附31の内省でも(1913年生まれ)；附4(1935年生まれ)；附2(1981年)は①だが、52項で「近年、若い人々の間では」②を記載
連体形			アム	ノル	シ ロイ	アカイ		形容詞平板式：連体形にもアカイの型を使う人はいる(田川・中川2014参照)
連用形			アミ	ノリ	→<	→<		附2表1など
命令形			アム	ノレ				附2表1など；「よ」の項も参照；「せよ」はセ1ヨ
う/よう(原形)			ノ モ	ノ ロ				乗ったり型 附2など
う/ようと[する]			ノ モート	①ノ ロート ②ノ ロート				①乗ったり型 ②乗とられ型 附33は②(トポトシテ1モ)；附39②(イヨースル-平板)；附2 附2表11注「言い切りにならないときは①のほかに②の「傾向がある」；Nとする・思う」で②①の順(言い切りと「とも」では①のみ)；附①(注で②もおかしくない)；附①とするで①②の順
か・かと	ネ コカ	トリカ	アムカ	①ノ ルカ (②ノ ルカ)	シ ロイカ	アカイカ		① 協力型・順接 用言尾高要求 ・動詞平板式：附2等は①で、附42のみ②(イクカド1カ)だが、②は旧形と見るべきか、あるいは表現上の変種か ・形容詞平板式：附42(オモイカ カルイカ)もあり ・名詞平板式+「か」：-カト-カト(平板)：附2 附2
が(格助詞)	ネ コガ	トリガ	アムガ	①ノ ルガ (②ノ ルガ)	シ ロイガ	アカイガ		① 協力型・順接 用言尾高要求 ・動詞平板式の②は旧形と見るべきか、あるいは表現上の変種か；附41-42②(イクガヨイ、①も)；附1表6②、注2で①も；附2 附2表8①②、辞典本体①、N[2]9；全編附①②(用法言及なし)；附①(20歳台1名②併用、②許容は他にもあり) ・形容詞平板式：附42(イロノ アカイガ ヨ1イ、附2
が(接続)	ネ コダガ	トリダガ	アムダガ	ノ ルダガ	シ ロイダガ	アカイダガ		協力型・順接 用言尾高要求 (注5参照) Nは形容詞平板式を-イガ-イガの順で掲載；名詞+だ+「が」は附2
かしら	ネ コカシラ	トリカシラ	アムカシラ	ノ ルカシラ	シ ロイカシラ	アカイカシラ		協力型・順接 用言尾高要求 カシラ 附2など
がてら			ノ ミガテラ	ノ リガテラ				乗ったり型 ガテラ 附2など
かも	ネ コカモ	トリカモ	アムカモ	ノ ルカモ	シ ロイカモ	アカイカモ		協力型・順接 用言尾高要求 ・名詞：N、動詞・形容詞：附2 ・動詞平板式について：附2は併用で-カ1モあり(強調形か)
から(起点)	ネ コカラ	トリカラ						協力型・順接 用言尾高要求 (注5参照) ・「から」の「から」とアクセントは同じと考えておく ・「からか・からは」は-カラガ-カラワ？(附44(か))、附①(は)
から(理由)	ネ コダカラ	トリダカラ	アムカラ	ノ ルカラ	シ ロイカラ	アカイカラ		・名詞+だ+「から」：附① ・動詞平板式：Nなど；附39最後無声化する動詞はイクカ1ラ等 ・形容詞平板式：Nは-イカラ-イカラの順で掲載；附①は逆
く					①旧 シ ロク ②新 シ ロク	アカク		乗っ取られ型 ・「寂しい」など4拍の形容詞起伏式は②になる傾向が特に強い ・②は附① 附② 附③にはないが、すでに附1表4に「新」として記載(1958年)；附2 附2表52項に「近年、若い人々の間では」として記載；附4拍は①②の順、3拍は①のみ；附3拍①②、4拍②①の順；附①、附①、附③・4拍とも②のみ
くて					①旧 シ ロクテ ②新 シ ロクテ	アカクテ		(上記「く」に「て」が低く接続) ・形容詞起伏式：上記「く」を参照 ・形容詞平板式：附①は「3モーラ以上」としてマルクテ(マルクテ)とするが他の資料は-クテ；上記「く」に「て」が低く接続し、クの無声化のため下げが前倒しになってきた形かと思われる
くは・くも					①旧 シ ロクウ ②新 シ ロクウ	①アカクウ ②アカクウ		・形容詞起伏式+「く」は：附3拍は①②、4拍は①②の順 ・形容詞平板式+「く」は：①は上記「く」に「は」が低く接続した形、②は「くて」に引かれた形か；附42①(「くも」も)；附2②；附1表6は②で、注3に①あり、附2 附2表2で「くも」についても同様；附①②両形；附①②両形；附①は①②の順；附①は3・4拍語とも①のみ；附①(「くも」も)；附①両形(読者次第)
くなる・ない					①旧 シ ロク ナレ ②新 シ ロク ナレ	アカクナレ		・「なる」「なる」が低く言いかた ・形容詞起伏式：Nでは3拍は①②、4拍は②①の順；附①0-20歳台にシロクナリ型を可とする者あり ・形容詞平板式：附①「くない」は10-20歳台高めばアカクナ1ルだが、「くない」は②式の言い方も併用または許容者が多い
くらい・ぐらい	①ネ コクライ ②ネ コクライ	トリクライ	①③アム クライ ②アムクライ	①②ノ ルカ ライ ③ノ ルクライ	①③シ ロイ クライ ②シ ロイクライ	①②アカイ クライ ③アカイクライ		① 協力型・順接 用言平板要求 クライ 乗ったり型 クライ ③ 名詞としての 平板型の「位」 ・「使い分け」(1)：名詞起伏式の①②について附48(グライとクライで同じ扱い)は「犬くらい怖い怖くない(犬なんて)」は②、「犬くらい怖いものはない(犬がいちばん怖い)」は①だが、②の人もある(動詞の場合も)富記載；しかしN[205]は、名詞起伏式につく場合について、近年は①が主流と言 ・「使い分け」(2)：附2 附3は動詞・形容詞につくときにグライ②とクライ③でアクセントを変えている；③は名詞「位」としての平板型アクセントで「このくらい」「くらい」と同じ；なお附2の辞典本体では「くらい」の用法は「修飾助詞」として○→「ぐらい○」、○「大きすぎる～のほうがいい」、○「降参する～なら」、「ぐらい」は○「これ～の大きさ」、○「酒～飲む」、○→「くらい○」；他のほとんどの文献資料に③の掲載がないのはこれを名詞「位」または接尾辞と見るためか、あるいは旧形か ・起伏式：附1 附2名詞・動詞・形容詞とも①②の順(グライ・クライで変えず)；附1名詞②、動詞・形容詞なし；附2 附3名詞②、動詞・形容詞③(クライ)、②(グライ)、ただし附3は形容詞なし；附①名詞①②(グライ・クライで変えず)；附①全品詞①②(グライ・クライで変えず)；附①全品詞①②(グライ)；附1713は名詞は尾高型に限定して②(グライ・クライ)；附①名詞・形容詞はグライ、

だけ・ だけだ/ が/に/は	①ネ コダケ ②旧 ネ コ ダケ	ト リダケ	①ア ムダケ ②旧 ア ム ダケ	∟ ルダケ	①シ ロイ ダケ ②旧 シ ロイ ダケ	ズ カイダケ	①協力型・順接 用言平板要求 ②乗っとり型 ダケ 強調すると ダケ1	・起伏式：神43、 変1 名詞②、 変2 名詞・動詞②、 変3 4動詞②、 変4 名詞は①、 変5 名詞は「花だけ」②、「雨だけ」①②の順、動詞・形容詞は②①の順、 変6 ①の順、 変7 ①②の順、 変8 47に①が優勢と記載、 変9 ① ・「だけだ・だけだ・だけに・だけに」は-ダケ1ダケ1ガ1ニ1ワ1直前が低いと1潜在化)： 変10 44、 変11 33(-ニ)、 変12 (-タ)、 変13 (-ワ)、 変14 7、 変15 [202, 218](-タ)、「 変16 」は 変17 34ダケノ(平板)；注6参照
だって	ネ コダツテ	ト リダツテ						・「だ」に「って」が低く続く： 変18 1、 変19 2 ・「 変20 」は-ニ1ダツテ(直前が低ければ1は潜在化)： 変21 33
たち	ネ コたち	ト リたち					協力型・低接	「ら」も、 変22 1、 変23 294項参照
たて			∟ ミタテ	∟ リタテ			乗っとり型 平板化	変24 1、 変25 2
たら →た								
だらけ	ネ コだらけ	①ト リだらけ ②旧 ト リだらけ					①乗っとり型 だらけ ②乗っとり型 だらけ	変26 79②、 変27 ②①、 変28 1、 変29 2①
だらう	ネ コだらう	ト リだらう	ア ムだらう	①∟ ルだらう ②旧 ∟ ル だらう	シ ロイだらう	①ズ カイだらう ②旧 ズ カイ だらう	協力型・順接 ①用言尾高要求 ②用言平板要求 だらう	動詞・形容詞平板式： 変30 1、 変31 2、 変32 ②のみ 変33 形容詞なし)； 変34 1、 変35 2、 変36 ②①の順、 変37 形容詞②、 変38 ②； 変39 動詞②のみ、形容詞②①の順、 変40 ②①の順は「まれに」、形容詞は-イ1だらう→-イ1だらう②の順で掲載； 変41 ②①； 変42 なし
つつ			∟ ミつつ (∟ ミつつ)	∟ リつつ (∟ リつつ)			乗っとり型 つつ	・-つつはおそらく旧形： 変43 48-つつ間かず「抵抗」あり ・ 変44 つつ； 変45 1、 変46 2は-つつ-つつの順、 変47 ②①； 変48 つつ-つつ つつ、 変49 なし、 変50 33のシつつ(平板)はさらに旧形か
って [引用]	ネ コって	ト リって	ア ムって	∟ ルって	シ ロイって	ズ カイって	協力型・順接 用言尾高要求	変51 2辞典本体、 変52 形容詞平板式は-イ1って-イ1っての順で
て・ ては・ても・ てから/だけ			ア ンて	∟ ツて	→くて	→くて	乗っとり型	変53 2など、「ては・ても」は-テ1ワ1-テ1モ(直前が低ければ1潜在化)； 変54 ④(でも)；「てから」は-テ1カラ、「てだけ」は-テ1ダケ-テ1ダケ(平板)；「てばかり」は-テ1バカリ-テ1バカリ； 変55 1、 変56 277項
てる			ア ンデル	∟ ツデル				変57 小
で・ では・でも	ネ コで	ト リで	→て	→て			協力型・順接	変58 2など、「では・でも」は-デ1ワ1-デ1モ(直前が低ければ1潜在化)； 変59 44④(でも)、 変60 [203]
でしょう [推測]	ネ コでしょう	ト リでしょう	ア ムでしょう	①∟ ルでしょう ②旧 ∟ ル でしょう	シ ロイでしょう	①ズ カイ でしょう ②旧 ズ カイ でしょう	協力型・順接 ①用言尾高要求 ②用言平板要求 でしょう	「だらう」の項参照
です	ネ コです	ト リです			シ ロイです	ズ カイです	協力型・順接 用言尾高要求 です	・形容詞平板式： 変61 1-イデス→-イデスの順(他項目と順序異なる) ・形容詞に「です」を直接つける言い方は 変62 38にもあり(アカイデス)
てない→ない								
と・ とか・とも [例挙など]	ネ コと	ト リと	ア ムと	①∟ ると ②∟ ると	シ ロイと	①ズ カイと ②ズ カイと	協力型・順接 ①用言尾高要求 ②用言尾高要求	・ 変63 使い分け傾向：引用用法と動詞の列挙用法では②が増え、条件用法では①が多いか ・用法言及のないものとして、動詞・形容詞平板式に対し 変64 ②①、 変65 1、 変66 2辞典本体① ・「とか」は「と」が①の場合は-ト1カ1(1は潜在化)、②の場合はそのまま平らに続く：名詞平板式は 変67 ①(列挙)；動詞・形容詞平板式は 変68 1、 変69 2辞典本体で②①の順(用法言及なし)； 変70 ②(列挙) ・「とは・とも」は①の場合は-ト1ワ1-ト1モ、②の場合はそのまま続く(1は潜在化)：名詞平板式+「とは・とも」： 変71 1、 変72 ①(用法言及なし)；動詞・形容詞平板式+「とも」： 変73 1、 変74 2②①の順(用法言及なし)； 変75 39②(シヌ1トモ イキ1ルトモ)
と [引用]	ネ コと	①ト リと ②ト リと						列挙：動詞・形容詞平板式は 変76 1本体は用法言及なく①だが、表6注2に「と(引用・列挙)」は②も、 変77 2本体②； 変78 動詞② 引用： 変79 2表5-6注に「引用の「と」は平板式名詞/動詞には低く下がってつことが多く」とあるが(つまり 変80 および②)、これはイントネーションのためか(3節(3)参照)； 変81 2本体 ・名詞平板式+「と」： 変82 ①多いが、 変83 も併用・許容の者複数あり ・名詞平板式+「だと」： 変84 ②、 変85 ②(ポーズ入れて①許容者あり) ・動詞・形容詞平板式： 変86 ①②
と [条件]	ネ コだと	①ト リだと ②ト リだと						条件：名詞平板式+「だと」： 変87 ①； 変88 50条件②(40条件以下調査せず) ・動詞・形容詞平板式： 変89 2辞典本体で動詞①、 変90 ①； 変91 (条件法)動詞①、形容詞①(②)； 変92 動詞①(接続助詞)； 変93 動詞②①； 変94 10-30-50条件各1名の調査では①②両形可
ど・ども			ア ムど	∟ リど			協力型・順接	・ 変95 1、 変96 2 ・「ども」はドのあとにモをそのまま続ける： 変97 1、 変98 2表2
どこるか・ どこの	①ネ コ ドコロカ ②ネ コ ドコロカ	ト リ ドコロカ	①ア ム ドコロカ ②ア ム ドコロカ	∟ ル ドコロカ	①シ ロイ ドコロカ ②シ ロイ ドコロカ	ズ カイ ドコロカ	①協力型・順接 用言尾高要求 ②乗っとり型 ドコロカ	変99 2①； 変100 1、 変101 2、 変102 小は名詞なし)で①②の順
として [随句]	ネ コとして	ト リとして						変103
な [禁止]			ア ムな	∟ リな			協力型・順接 用言尾高要求 (注5参照)	変104 2など

へ、 へは・へも	ㄱ 코헤	ト 리헤					協力型・順接 ㄱn2など、「へは・へも」はエ7ワ、エ7モ(直前が低ければ1は潜在化)：ㄱ44、ㄱ71、ㄱn277項参照
べき・べし			①ㅍ ムベキ ②ㄹ ムベキ	ㄹ ムベキ			①協力型・順接 用言平板要求 ②乗っとり型 ベキ
ほど	ㄱ 코호ド	ト 리ホド	ㅍ ムホド	ㄹ ムホド	ㄱ 로 イホド	ㄱ 카이ホド	協力型・順接 用言平板要求 平板 ・ㄱn2など ・平板式の語+「ほど+助詞」は、助詞が「ほど」と同じ高さでつく形(名詞「程」の性質を残すと)、低くつく形がある：ㄱ アレホドノ、キータホドデモ(いずれも平板)；ㄱ62注8に「ほどで、ほどと・ほどに・ほどは・ほども」は「ほど」の後で下がるが、ㄱ もあとの下げの印なし；しかしㄱ 202、218に「ほどは」は下がる形と併記；ㄱ あとの下げの印あり；「ほどだ」もㄱ 218は下がる形ホド1ダもあるとし、ㄱ は下がる形のみ
まい			ㄹ ムマイ	ㄹ ムマイ			乗っとり型 マイ ㄱn2など
ます・ ました・まし よう・ません			ㄹ ミマス	ㄹ ミマス			乗っとり型 マス ・ㄱn2など ・「ました・まじょう・ません」はマ1シタ・マシヨ1・マセ1ン
まで	ㄱ 코마デ	ト 리マデ	ㅍ ムマデ	①ㄹ ムマデ ②ㄹ ムマデ	ㄱ 로 イマデ	ㄱ カイマデ	①協力型・順接 用言平板要求 (備考参照) マデ ・②は少減派かつ併用・②が本来の形(用言尾高要求)で、①は助詞の強弱形が固定化したものか(「のみ」の項参照) ・動詞平板式：ㄱ1・ㄱ2・ㄱ3 ・形容詞平板式：ㄱ1・ㄱ2 ・ㄱ85に「坂オソクマデ」の例あり
みたい・ みたいだ/な	ㄱ 코ミタイ	ト リミタイ	ㅍ ムミタイ	ㄹ ムミタイ	ㄱ 로 イミタイ	ㄱ カイミタイ	協力型・順接 用言平板要求 ミタイ ㄱn2など
も	ㄱ 코モ	ト リモ	ㅍ ムモ ㄹ ムモ	①ㄹ ムモ ②ㄹ ムモ	ㄱ 로 イモ	ㄱ カイモ	①協力型・順接 用言尾高要求 ・動詞平板式の②は旧形と見るべきか、あるいは表現上の変種か；ㄱ41②(イクモ・カエルモ)、ㄱ1、ㄱn2表6①②、辞典本体 ①、ㄱ2①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ ・形容詞平板式：ㄱ1、ㄱn2表8、ㄱ ㄱn2表1、ㄱn2表9
ものか・ もんか			ㅍ ムモノカ ㄹ ムモノカ	ㄹ ムモノカ			名詞の「物+「か」(モノカ・モノカ)と同じ；ㄱ1、ㄱn2表6注5、表5注4参照；「ものの」はモノノ(平板)
や	ㄱ 코ヤ	ト リヤ	ㅍ ムヤ ㄹ ムヤ	①ㄹ ムヤ ②ㄹ ムヤ	ㄱ 로 イヤ	ㄱ カイヤ	協力型・順接 用言尾高要求 動詞平板式の②は旧形と見るべきか、あるいは表現上の変種か；ㄱ42(イクヤ・イナヤ)、ㄱ2、ㄱ1、ㄱn2①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿では動詞は「聞くや否や」で、ㄱn2表6注①；ㄱ1(名詞のみ)；ㄱなし
やら	ㄱ 코ヤラ	ト リヤラ	ㅍ ムヤラ ㄹ ムヤラ	ㄹ ムヤラ	ㄱ 로 イヤラ	ㄱ カイヤラ	協力型・順接 用言尾高要求 ㄱ2、ㄱ1、ㄱn2表6注、ㄱn2形容詞平板式には-イヤラ(イヤラ)
よ [告知]	ㄱ 코요 ㄱ 코だよ ㄱ 코だよ	ト リヨ ①ト リだよ ②ト リだよ	ㅍ ムヨ ㄹ ムヨ	①ㄹ ムヨ ②ㄹ ムヨ	ㄱ 로 イヨ	①ㄱ カイヨ ②ㄱ カイヨ	協力型・順接 ①用言平板要求 ②用言尾高要求 (使い分けあり) ・3節(4)参照 ・この上にさらに各種の文末のイントネーションがかかる ・使い分け：やさしく教えたり反応を求める場合は①+疑問型上昇調で、相手の意見との違いをはっきりさせたい場合は②の傾向(ㄱ202)；ㄱ1+疑問型上昇調は注意喚起、呼びかけ、感情・感覚の述べ立て、意見の主張、うながし、②は反発をともなう述べ立てや主張、行動要求をあらわす語について強く行動を要求 ・ㄱ1、ㄱn2辞典本体①(動詞は表6で②も)、ㄱ1①②(ともに形容詞平板式には①のみ、ㄱ1は名詞記載なし)、ㄱ2③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ ・命令形+「よ」はノ1ヨ、ノ1ヨ：ㄱ1、ㄱn2表6注、起伏式の一段「サ変の「起きよ」はオ1キヨ・オキ1ヨ、「調べよ」はシラ1ペヨ・シラペ1ヨ、「ませよ」はア1セヨ・アイセ1ヨ；ㄱ1、ㄱn2
よ [呼びかけ]	ㄱ 코요	ト リヨ					協力型・順接 ㄱ1、ㄱn2
よう →							
ようだ・ ような/に			ㅍ ムヨダ ㄹ ムヨダ	ㄹ ムヨダ	ㄱ 로 イヨダ	ㄱ カイヨダ	協力型・順接 用言平板要求 ヨ→ダ ㄱn2表14など
より	ㄱ 코ヨリ	ト リヨリ	ㅍ ムヨリ ㄹ ムヨリ	①ㄹ ムヨリ ②ㄹ ムヨリ	ㄱ 로 イヨリ	①ㄱ カイヨリ ②ㄱ カイヨリ	協力型・順接 用言尾高要求 ヨリ 強調すると 「ヨリ」 ・3節(1)参照(②は発調形と見る) ・動詞・形容詞平板式：ㄱ39、40①；ㄱ1、ㄱn2①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ ・動詞①②両形、形容詞①；ㄱ1動詞②(形容詞なし)；ㄱ1①；ㄱ1形容詞①②の順(動詞なし)；ㄱなし；ㄱ1両形あるが、10-20歳台では①優勢
らしい [推測]	①ㄱ 코らし ②ㄱ 코らし	ト リらし	①ㅍ ムらし ②ㅍ ムらし	ㄹ ムらし	①ㄱ 로 イらし ②ㄱ 로 イらし	ㄱ カイらし	①乗っとり型 ②協力型・順接 用言平板要求 ラシー 強調すると ラシー ・2形活用状態か ・名詞起伏式：ㄱ1、ㄱn2①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ ①②の順(用法言及なし)；ㄱ1②両形(用法言及なし)；ㄱ2①；ㄱ2②；ㄱ2両形あり ・動詞・形容詞起伏式：ㄱ75①(「大抵」と注記)；ㄱ2①；ㄱ1、ㄱn2辞典本体①②の順、動詞は表10で②、その法で①も；ㄱ1①；ㄱ1②；ㄱ1③；ㄱ1④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ ・ㄱ1①の順(用法言及なし)；ㄱ1両形あり
らしい [適切]	ㄱ 코らし	ト リらし					乗っとり型 ラシー ㄱ1、ㄱn2表36項
れる/られる			ㄹ ムラレル	ㄹ ムラレル			乗っとり型 レ(ル) ・さらに他の助詞・動詞がつく場合については、本表のそれぞれの項参照 ・ㄱn2表14など
わ [終助詞]	ㄱ 코ワ	ト リワ	ㅍ ムワ	ㄹ ムワ	ㄱ 로 イワ	ㄱ カイワ	協力型・順接 用言尾高要求 (注5参照) ㄱ1、ㄱn2形容詞のみ
を	ㄱ 코オ	ト リオ	ㅍ ムオ ㄹ ムオ	①ㄹ ムオ ②ㄹ ムオ	ㄱ 로 イオ	ㄱ カイオ	①協力型・順接 用言尾高要求 動詞平板式の②は旧形と見るべきか、あるいは表現上の変種か；ㄱ1、ㄱn2辞典本体①、表6に①②；ㄱ1括弧に入れて①のみ；ㄱ1①(20歳台1名②併用、②許容は他にもあり)